

追悼 吉見宏先生

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターの境界研究ユニット(UBRJ)の前身にあたる、グローバルCOEプログラム「境界地域の拠点形成:スラブ・ユーラシアと世界」(2009-2014年)の立ち上げ以来、ボーダースタディーズの研究・教育コミュニティづくりに貢献してこられた、吉見宏先生(北海道大学理事・副学長)が2023年1月2日にご逝去されました。行年61歳という若さでした。ここに謹んでお悔やみ申し上げます。

吉見先生は長崎市で生まれ、九州大学経済学部に入學後、同大学大学院経済研究科博士後期課程を経て、北海道大学にて博士(経営学)を取得されました。専門は公会計、監査論で、北海道大学大学院経済学研究院を舞台として、長年に亘り、研究、教育でご活躍されました。

私が先生と知り合ったのは、2007年3月28日、札幌で定期的に行われていた九州大学の同窓会(松風会・藤田安憲さん主宰)第77回例会の席上でした。先生と私は年齢が近いこと、また九州大学の大学院生時代に隣の建物でご一緒したこともわかり、すぐうちにとけました。グローバルCOEプログラムへの申請の際に、先生にお声がけしたのもこの出会いがきっかけでした。ちなみに北海道大学総合博物館の故・松枝大治教授(のちに館長)もこの同窓会で知りあい、メンバーにお誘いしており、いまなお北海道大学総合博物館の展示ブースでボーダースタディーズの成果は日々、発信されています。

さて吉見先生とのおつきあいはこうして始まりましたが、先生はご専門を超えて、実社会にも太いパイプを持ち、私は先生に様々な場所に誘われることとなります。まず先生の後任として、2010年4月、HBC(北海道放送)の番組審議委員に就任しました。この地元メディアとの出会いが縁となり、様々な番組においてボーダース



タディーズの成果を発信する機会を得ることになります。グローバルCOE時代に制作した数々の「知られざる日本の国境」シリーズの映像DVDはまさに先生が先鞭をつけてくださったものと言えます。その集大成ともいえる「国境は涙を信じない」(構成 竹内陽一)はHBCから2011年12月30日に放映されました。

吉見先生が与えてくださったもう一つの場合、北海道大学出版会でした。先生の要請により、2012年から一緒にペアを組むかたちで、出版会のもう一人の監事に就任しました。当然、ボーダースタディーズの成果に関わる発信を北海道大学出版会でプロデュースする機会が増えました。2014年に設立されたNPO法人国境地域研究センター(JCBS)のブックレット・ボーダーズのシリーズなどはこのご縁がなければ誕生しなかったでしょう。

もちろん吉見先生は、直接的にもボーダースタディーズのプロジェクトに貢献されました。大学院経済学研究科長・経済学部長時代には、沖縄県与那国島に当時オーバードクターであった若手研究者を専門員嘱託員として派遣するに際し、ご支援いただきました(2014年8-11月)。また本誌『境界研究』などのレビューの相談なども積極的にのってくださり、ご自身も特別号(2014年)において、「国境を越えるライトレール」というユニークな論文を寄稿くださいました。これは、およそ会計学を専門とされる先生のお仕事とは思えない、異色の内容ですが、吉見先生は道内でも、指折りの「鉄っちゃん」として有名であり、「札幌LRT(次世代型路面電車)の会」会長を1996年の設立以来務め、またJR北海道を始め、交通問題にかかわる諮問(JR北海道再生推進会議など)も手掛けておられました。

2022年から、吉見先生は北海道大学理事・副学長と就任されましたが、引き続き、境界研究ユニットのメンバーとして、また『境界研究』の編集委員として、つまり、私たちの研究仲間のひとりとして、お付き合いを続けてくださいました。その先生の訃報に接したとき、私たちはあまりのショックに言葉を失いました。

先生ともっと一緒に仕事をしたかった、先生ともう少しお話をしたかったという思いが、日々募り、先生がもうおられない現実をいまだ受け入れられずにいます。

先生のこれまでのご尽力にお礼申し上げるとともに、これからも先生の思いを忘れずに、ボーダースタディーズに関わる事業を続けていくことで、少しでもご恩に報いることができればと願っています。

吉見宏先生、どうぞ安らかに眠りください。ありがとうございました。

2023年3月2日

境界研究ユニットを代表して
岩下明裕